

大学文書館へ 行こう

第26回 「修学旅行が描く物語り」

北海道大学大学文書館 井上 高聡



修学旅行をきっかけに北大に入学した加藤セチ (1936年)

盛岡・青森間の鉄道が開通し、上野から青森までの東北本線が全通したのは一八九一年です。函館・札幌間の開通は一九〇五年、青森と函館を結ぶ青函連絡船は一九〇八年に運行を開始します。東京から札幌まで、鉄道と連絡船を乗り継いで行き来が可能となります。一九〇〇年前後、日本に鉄道網が張り巡らされるに伴い、鉄道を利用した遠方への修学旅行が行なわれるようになりまます。折しも、札幌農学校は一九〇三年に市街地からキャンパスを移転し、附属農場を臨む現キャンパスへ校舎を新築しました。一九〇七年に東北帝国大学農科大学として大学に昇格し、一九一八年には北海道帝国大学となります。修学旅行の恰好の見学地でした。

東京女子高等師範学校の修学旅行

一九一八年七月九日、東京女子高等師範学校（現お茶の水大学）の修学旅行一行が北海道帝国大学を訪れ、午前中に大学構内と第二農場、午後に植物園・博物館を見学します。北大総長佐藤昌介は、東京女高師生徒に向けて「私の大学は大いに門戸を開放いたしますから、御希望者は遠慮はいらぬ」と、北大では女性も入学できると述べました。当時、女性が帝国大学に進学するルートは制度上作られておらず、一九一三年に東北帝国大学理科大学に三名の女性が入学した例があるのみでした。

この佐藤総長の発言に呼応したのが、東京女高師を三月に卒業し、四月から札幌の北星女学校の教員となっていた加藤セチです。加藤はOGとして修学旅行一行の大学見学に参加していました。加藤は、「佐藤昌介総長が『この学校は決して女子に門戸を鎖すものではない』とおっしゃった」「よしそれではもう一度勉強のやり直しをしよう」と決心した」と回想しています。その後、紆余曲折があり、加藤は九月に北海道帝国大学農科大学に全科選科生（すべての科目を履修できる学生）として入学しました。北大最初の、そして日本でも四人目の女性の大学生は、修学旅行をきっかけに誕生しました。加藤は後年、女性科学者の草分けの一人となります。

花巻農学校の修学旅行

一九二四年五月二〇～二一日に札幌を訪れた花巻農学校の修学旅行は、当時同校の教員であった宮澤賢治が引率しており、「修学旅行復命書」を記しています。二〇日に札幌に到着した一行は植物園・博物館を見学し、翌二一日に北大キャンパスを訪れています。「報告書」は、学生二名が迎えて案内し、花巻出身の佐藤総長が予定を変更して一行に應對したと記しています。佐藤総長は生徒たちに向け、新



宮沢賢治が「清楚なる芝生と黒き楡の間馬蹄形に配置せられたる教室」と記した農学部の校舎群 (1920年代後半)

盛岡高等女学校の修学旅行

一九二六年六月、盛岡高等女学校の修学旅行一行が北海道帝

国大学を訪れ、佐藤総長と中央ローンで記念撮影をしています。その記念写真が、先頃、大学文書館に寄贈されました。寄贈者は、佐藤の右隣に写っている生徒富田貞のご息女戸田洋子氏（盛岡市在住）です。戸田氏のご母堂から伝え聞いている話によると、盛岡高等女学校は、同郷の名士佐藤が総長を務めている間、毎年、修学旅行で北大を訪問していたそうです。そして、富田貞はこの記念写真を終生、大事に持ち続けていたとい

います。修学旅行は北大を舞台として、参加者にさまざまな物語りを作り出したようです。



中央ローンで撮影した盛岡高等女学校の修学旅行記念写真 (1926年6月)